

女 處

號 月 十



東京
女子文壇社發行

明治三十二年十月一日創刊
第三十三年十月一日創刊
第三十四年十月一日創刊
第三十五年十月一日創刊
第三十六年十月一日創刊
第三十七年十月一日創刊
第三十八年十月一日創刊
第三十九年十月一日創刊
第四十年十月一日創刊
第四十一年十月一日創刊
第四十二年十月一日創刊
第四十三年十月一日創刊
第四十四年十月一日創刊
第四十五年十月一日創刊
第四十六年十月一日創刊
第四十七年十月一日創刊
第四十八年十月一日創刊
第四十九年十月一日創刊
第五十年十月一日創刊
第五十一年十月一日創刊
第五十二年十月一日創刊
第五十三年十月一日創刊
第五十四年十月一日創刊
第五十五年十月一日創刊
第五十六年十月一日創刊
第五十七年十月一日創刊
第五十八年十月一日創刊
第五十九年十月一日創刊
第六十年十月一日創刊
第六十一年十月一日創刊
第六十二年十月一日創刊
第六十三年十月一日創刊
第六十四年十月一日創刊
第六十五年十月一日創刊
第六十六年十月一日創刊
第六十七年十月一日創刊
第六十八年十月一日創刊
第六十九年十月一日創刊
第七十年十月一日創刊
第七十一年十月一日創刊
第七十二年十月一日創刊
第七十三年十月一日創刊
第七十四年十月一日創刊
第七十五年十月一日創刊
第七十六年十月一日創刊
第七十七年十月一日創刊
第七十八年十月一日創刊
第七十九年十月一日創刊
第八十年十月一日創刊
第八十一年十月一日創刊
第八十二年十月一日創刊
第八十三年十月一日創刊
第八十四年十月一日創刊
第八十五年十月一日創刊
第八十六年十月一日創刊
第八十七年十月一日創刊
第八十八年十月一日創刊
第八十九年十月一日創刊
第九十年十月一日創刊
第九十一年十月一日創刊
第九十二年十月一日創刊
第九十三年十月一日創刊
第九十四年十月一日創刊
第九十五年十月一日創刊
第九十六年十月一日創刊
第九十七年十月一日創刊
第九十八年十月一日創刊
第九十九年十月一日創刊
第一百年十月一日創刊

第 第
二 九
号 卷

始



翻反	影	三木露風	(二)
類顔	(小説)	水野間子	(一)
題落	目(短歌)	土岐哀果	(三)
題習	作(小説)	伊藤野枝	(四)
題父を思ふ	歌(短歌)	前田夕暮	(三)
題まさしの日記	記(小説)	長谷川しづれ	(三)
題スケッチブックより	(繪)	竹久夢二	(七)
題命の赤兒	(長詩)	人見東明	(三)
題病後の秋	(短歌)	若山喜志子	(三)
題淋しき命より	(短歌)	岡本かの子	(三)
題君はあり	(短歌)	原田琴子	(七)
題我が創作の自己批評	創作諸家	田村俊子	(八)
題自分の家(小品)	上司小創	兒玉花外	(三)
題無花果と女(小品)	白木糸子	蘇律子	(四)
題胎動(小品)	白木糸子	蘇律子	(四)
題歐洲土産の断片(感想)	田村俊子	蘇律子	(八)
題宗之助の静謐と松島玉の井と(感想)	田村俊子	蘇律子	(八)

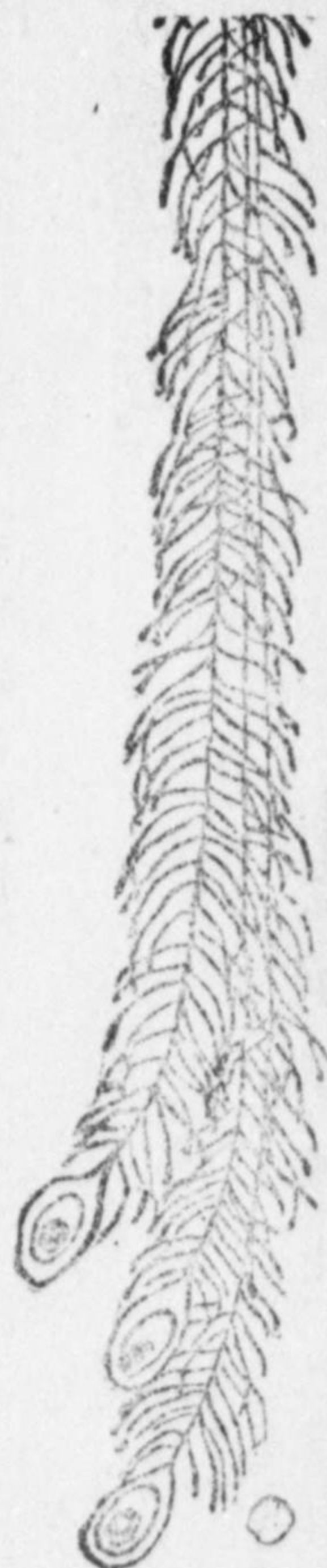
諸藝家

國音	戸かち	吳(小説)	八百村夜調子	(三)
國夫	さだまりて	(短歌)	河野錦子	(五)
國眼	を病む女	(散文)	歌川千代子	(六)
國やみ人の唇より	(長詩)	甘南寺ふみ子	(八)	
國特別創作選評	(批評)	四選者	(一〇)	
國九月の歌壇	(批評)	原田琴子	(一二)	
國藝術座偶感	(雜感)	吉田常夏	(一四)	
國新化粧問答	(問答)	藤波芙蓉	(一六)	
國洪水の前(小説)	新免さかゑ	石屋の娘(小説)	寺澤九十子	(二七)
國嫁くまで(小説)	新妻みほ子	甘き桑酒(長詩)	蘭田久	(二九)
國初秋の歌(長詩)	藤井ます	ゆふかげ(長詩)	畔蒜こと子	(三七)
國空想の女(散文)	霜子	銀の匙の思ひ出(散文)	大江正野	(三九)
國壁の味散文	小島鈴枝	日記	榎木夕美子	(四一)
國紫の聖(短歌)	村田すみれ等	手紙	田村美子	(四三)
國小雨ふる日(小品)	新免さかゑ	人(小品)	長澤美也子	(四五)
國白霧集(俳句)	山下夕映等			(四七)
國小說	小笠原貞子選	國長詩	望月れい子選	
國日記	白木糸子選	國短歌	原田琴子選	
國小品	山田邦子選	國俳句	編輯局選	
國小評論		國文學消息		
國編輯室		國演藝消息		
國新流行界				

★

大懸賞文募集！





顔

水野仙子

桃割れに結つた道子の姿が、上野停車場の人込みの中に見えたのは、十一時に二十分ばかり前の時であつた。人力車から降りて、入口に併んでゐる赤帽の一人に、蹴込みに置いて来た行李を、手荷物にするやうに渡す間にも、始終よくと動いてゐる人込みの中を氣にして居た。

二等待合室の中にはひつて、皆に顔を振り向けられて一寸赤くなりながらも、そこにも豫期して居た顔が見えないのを知ると、ほつとしながら、またどうやら物足らなうにそこを出た。

『どちらまでいらつしやいます?』と、隨いて来た赤帽が言つた。

『白河よ。』

『それぢや十一時五分の下りですな。もう間もなく出ます、切符を買つてまゐりませう。』

『さう、十一時五分なの?』

道子は驚いたやうに言つた。どうしたのだらう、十一時三十分の筈だつたので、若様にもさう言つてあるのに。

『十一時三十分ぢやなかつたこと?』

『いゝえ、十一時三十分のは常盤線ですから、白河へいらつしやるなら十一時五分のでなければいけません。』

『さう、ぢや私の見違ひだつたかしら。』と言ひながら、一寸後向きになつて紙入から五圓紙幣をぬき取り、

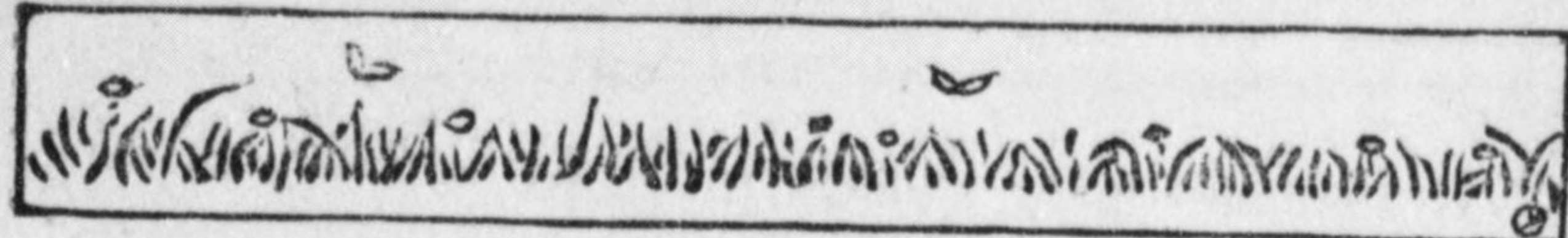
『ぢや白河まで一枚買つて頂戴、二等を。』と言つた。

二等で故郷まで行くのは初めてなので、なんだか胸が躍るやうであつた。だけど、『都合によつたら僕も赤羽あたりまで一緒に行かう。』といった言葉が頭にあるので、二等にするのが當然のやうにも思へ、なけなしのお錢を使つてしまふのも、ちつとも惜しくなかつた。

だけど『間に合ふかしら?』と思ふと心許ない。時間表を見ると、確かに青森直行は十一時五分であつた。十一時三十分といふのがその次に並んで居る。どうしてそんな見間違ひをしたものだらう。二十五分の違ひだから、大抵それまでには見えるだらうとは思ふけれど、考へるとだんぐ心

が落着かなくなつて来る。大丈夫だとも見えるし、また駄目なやうにも思へる。

今朝自分よりはつと早く、学校の制服制帽で何氣なく家を出た若様のことを思ふと、もうすぐにもそこに、その顔と姿が浮き出るやうな氣がして、道子は思はずひとりで顔を赤らめた。赤帽が



顔

處女十月號 (考)

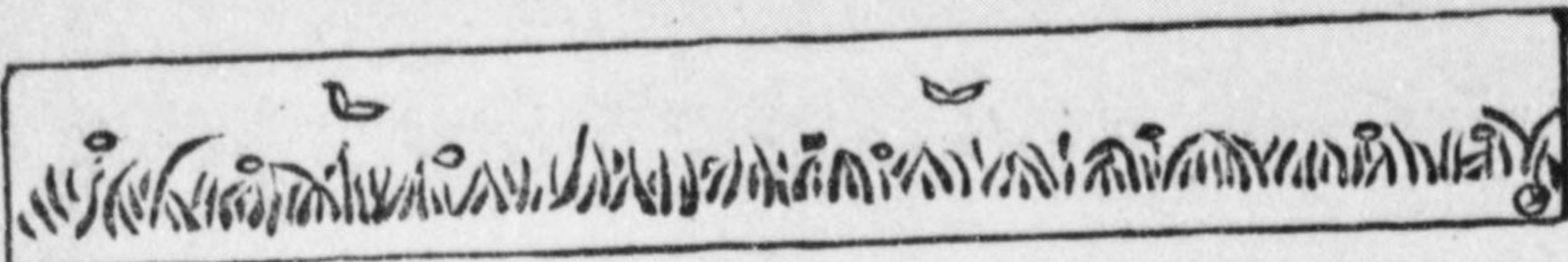
剩餘錢と、青い切符と小手荷物(こてもつ)のチツキとを渡して行くと、急にまた不安になり出して、急いで入口のところに立つて見た。絶えずせか／＼と、人力車や徒歩で集つて来る澤山(やま)な人の姿に、一々目を遣つてみるけれど、似よつた人はひとりも居ない。遠くの通りまで眺めてみても、ひよつこりと浮き出しさうで居て、それはみんな見も知らぬ人が歩いて居るのであつた。

すべての物音がどつちやになつて、たゞそ／＼と聞える場内のざはめきが、一刻々々複雑になつて行く。動きさうもなく思はれるやうな大きな時計の針も、もう十一時に五分ばかり前のところを指して居る。氣早(きばや)な人達は改札口(かいさつこう)の前に並んで、大きな澤山(やま)な荷物を抱(かか)へながら、我慢強く改札の初(はじ)めるのを待つて居る。

この次の下(くだ)りにのるには、もう二時間近くも待たなければならぬ。なんだか／＼して出て来た以上、一刻も早く乗つてしまひたいやうな、旅馴(たびな)れない氣分(きぶん)がするし、折角(せつかく)送つてくれる筈(はず)の若(わか)様(さま)に、黙(だま)つて發つてしまふのは濟(す)まなくもあるし残り惜(を)しくもある。何故(なぜ)ほんとに、いつになく時間の見違(みちが)ひなどをしたのだらう。

とう／＼改札(かいさつ)を知らせる鈴(すず)が鳴つた。一度に動き出したやうな足音(あしおと)が、天井(てんじやう)の高い場内(ぢやうない)に聲(こゑ)に雑音(ざつおん)をたて、響(ひび)く。すると、今の今(いま)までさ／＼に思ひ迷(まよ)つて居た道子(みちこ)は、する／＼と引(ひ)かれるやうに改札口(かいさつこう)の方に急(いそ)いだ。チキンと切符(きふ)に缺(けつ)がはいつた時、もう駄目(だめ)だといふやうな、最後の失望(しつぱう)と一緒に、諦(あきら)めたやうな、また男(おとこ)に置いてきぼりを喰(く)はせることの、痛い快(こころよ)さであることなどを道子は経験(けいけん)した。

なんとなく緊張(きんぢやう)した心(こゝろ)であつた。窓(まど)から半身(はんしん)を乗り出して赤帽(あかぼう)を呼(よ)ぶ聲(こゑ)や、ぶつかりさうに駈(か)け



廻(まわ)つてはぐれた連(つ)れを探(さが)す人(ひと)だの、窓(まど)の前に寄り添(よ)つて別(わか)れを惜(を)しんで居る見送り(みおくり)の人(ひと)だのを、手持(もぢ)不沙汰(ふさた)に眺(なが)め廻(まわ)しながら、それでもまだ、今(いま)にもこゝへ驅(か)けつけて來(き)さうな氣(き)がして、道子(みちこ)は絶(た)えず目を窓(まど)の外(そと)に配(く)つて居た。幾度(いくど)か後(あと)ればせに驅(か)けて來(き)て、慌(あわ)て、車内(しやない)に飛(と)び込(こ)む人(ひと)があつた。見送り(みおくり)の人(ひと)達が窓際(まどぎは)から離(はな)されると、廣(ひろ)いプラットフオームに暫(しばらく)動く人(ひと)の影(かげ)がなくなる。つひに汽笛(きてつ)が鳴(な)つた。さうしてゴトリと汽車(きしや)は動き出した。

それでも／＼と思つてた望(のぞ)みが消(き)えると、道子(みちこ)は急に涙(なみだ)ぐましいやうな寂(さび)しい氣分(きぶん)になつて、それとも、波立(なみだ)つて居た心(こゝろ)がすつかり靜(しづ)まつて來(き)るのを覺(おぼ)えた。汽車(きしや)は走(は)つて居る。もうどうもならないと思(おも)ふと、却(かへ)つて落着(おち)いて來(き)た。なんだか二等(にとう)になぞ乗(の)つたのが張合(はりあ)ひ抜け(ぬ)けたやうである。

道子(みちこ)は明るい色のグツシヨンの隅(すみ)の方に、足(あし)が届(と)かなくなるほど奥深(おくふか)く掛けて、初めて繁(しげ)々とあたりを見廻(みまわ)した。贅澤(ぜいたく)な膝掛(ひざかけ)を敷(し)いて場所(ばしょ)を工合(くあ)ひよく作(つく)つて居る人(ひと)だの、無造作(むぞうさく)に腰(こし)を掛けて反身(はんみ)になつて新聞(しんぶん)を讀(よ)んで居る人(ひと)だの、客(きやく)はあまり込(こ)み合(あ)つて居なかつた中に、女(をんな)といふのは、向(む)かひの隅(すみ)に場所(ばしょ)を取(と)つて居る夫婦(ふうふ)者と道子(みちこ)のたつた二人(ふたり)だけであつた。その細君(さいくん)の瘦(うす)せぎすな、あまり器量(きりやう)のよくない顔(かほ)を見て取(と)ると、道子(みちこ)は安心(あんしん)したやうに益々(ますます)心が落着(おち)いて來(き)た。桃割(ももわり)れや、白粉(おしろい)を刷(は)いた顔(かほ)や、赤(あか)っぽい帶(おび)やが、一つの色采(いろどり)となつて、此室内(このしつない)に明るく點(てん)じてあるやうにさへ思(おも)へた。銘仙(めいせん)や博多位(はくたゐ)の貧(みづ)しい着類(きやうるい)も、ばつとした初々(はつはつ)しい若(わか)さの光(ひかり)に、澤々(つや)しく見(み)えるやうな氣(き)もして満足(まんぞく)だつた。

緑色(みどりいろ)のカーテンが、襪(ひだ)になつて寄せられた窓匡(まどわく)のあたりに、秋(あき)の日(ひ)が斜(な)めにさし込んで居る。目

顔

處女十月號 (七)

まろろしくいくつもの線になつて目を掠めて行く土手を、いつまでも眺めて居たので、ふとぐらぐらとして目をつぶつた時、ついと扉を開けてボーイが出て來た。無意識にみんなの顔がそつちに向くとボーイは馴れ切つたやうにつと目を外して、

『どちらまでいらつしやいます?』と、道子の前に體をかきめた。

『白河……』といひさしながら、道子は赤らみかける血を一心を抑へて顔に出すまいとした。

ボーイは次々に小腰をかきめて、時々は凄じく高くなる車輛の響に、客人の口許近く耳を寄せて行先を問うて歩いた。その姿が次の室へと消えて行くと、道子はなんとなくほつとして、鼓動の打つて居る胸を助はるやうに、體を斜かひにして所在のない目を窓の外にそ、いだ。

ボーイは、列車の給仕などには少し老け過ぎた位の年頃で、年よりは一つ二つ若く見える道子と同一年か、或は一つほど兄さん位にも見える。恐らく數年十九になる自分の方が、一つ二つは上であらうと、道子はわざとさう思ひながら、ふつと最初に行當つた時の目を思ひ出して居た。上野で乗り込んだ時に、客の荷物の世話などを焼いて居たボーイは、道子からもバナ、の籠と小さな袋とを取つて、棚の網の上に乗せて呉れた。その時にちらと目が當つた。けれども他に氣の取られて居た道子は、別に氣もつけないで忘れて居たのであつた。恐らくはボーイは何の氣もつかかなかつたであらう。

また扉が開いた。ふいつと思はず振向くとまた目が合ふ。ボーイは人々の前を會釋するやうにして通つて出て行つた。

『似てらつしやる!』

かう思ふと道子の胸は波立つて來る。今時分あの停車場の人込みの中に、自分を探し求めてゐる一人の男を思ふと、いつにない懷しさがづつと身内に流れ廻つて、一言も言ひ置かずに發つて來たことが悔ひられる。わざと時間を違へて欺したやうに思はれてはと考へると、居ても立つても居られないやうに不安になつて來て、一刻も早く故郷に着いて、今日の始末を書いて送らなければ氣がすまない。それにしても汽車がまどろかしい。また、僅に二時間ばかり待てなかつたのと言れたら何と返事をしやうもないほど譯もなしに發つて來たのだから、自分ながら困つてしまふ。

するとまた道子は、男をさうしてまでも發つて來られる自分の心強さが、頼もしくもあり得意でもあるやうな氣がして、

『私は若様を戀してるのぢやない。若様が私を戀してるのだ。』といふやうな心を抱く。

どうしても會ひたいからといつて、假病をつかつて、今かうして自分を呼び寄せる田舎の祖母と若様とを較べたなら、どつちが今の私を引つけるだらう? こんなことも道子は考へて見た。しかしそんなことはもう、思ひ惑ふまでもないことだつた。祖母は懷しい。けれどもまたそれだけである。『私はやつぱり直ぐに歸つて來なければならぬわ。』と道子は自分の心に言つた。『だけれども私は若様を戀してるのだらうか? 若様が私を戀して下さるから、それで私は若様を懷しんでゐるのではないだらうか? 私は初め若様をどうも思へやしなかつた。それなのに若様は私を……』

そんなに嫌ひでも厭でもないやうである。たゞ私の好きな顔はもつと外にあると、いつもさう思へる。だけど、さういふ顔を持つてゐる男に、まだ一度だつて會つたことがないやうな氣もするのは、今まで讀んだいろ／＼な小説の中から、好きな男の顔を空想して、私はそれを思つてゐるからぢやないだらうか？』

いつか小山に着いたと見える。窓の日が陰つたと思ふと、列車は靜かにプラットフォームをすれすれに歩いて、やがて止つた。

と、先刻のボーイがはいつて来て、客の辨當や茶を世話焼いてくれる。

『お辨當はいかゞなさいます？』と、道子の前にも來て尋ねた。その時道子は思ひ做しのせいか、ボーイの方でも少し顔を赤めて居るやうな氣がした。

『面影がほんとによく似て居る！』と思へば思ふほどそつくりになつて見える。若様の魂が、ボーイに乗りうつて、それであの顔があつてもそつくりに見えるのではないか知らなとも思つて見る驛々に着くたびに、新しく客がはいつて來たり、下車をする人などがあるので、その都度にボーイは出て來て忠實々々しく氣を利かして居た。道子にはそれを見て居ることが、嬉しいやうでもあれば、又妙に寛がない氣持にもなるのであつた。

『私の氣の迷ひかも知れない。私の氣の迷ひかも知れない。でなければ、私の眸に煎りつけられた若様のお顔が、たま／＼あのボーイの顔に氣配られたのであるかも知れない。』

道子はなんとなく惱しくなつた。うつら／＼と少し眠りたいやうでもあつたけれど、若しもいざたなく眠りこける姿を、あのボーイにでも見られたらと思ふと、それも厭である。

『しつくりと合つた心持を見出さないで居るうちに、私の心はいつか若様の胸に喰ひ入つて居た。假令私がどんな運命にならうとも、若様は私に取つて忘られない最初の人であつた！』

列車は今那須野あたりを走つて居るらしい。だん／＼故郷に近づいて來たと思ひながら、立つて隅の方に寄つて窓から首を出す、意外にも隣室の窓から、そこにあのボーイの首が出て居た。

道子は、つとして目を外した。穗になつた薄の叢の間々に、桔梗や女郎花の秋草が、可憐な色を粧つて咲きほこつて居る。道子は久し振りで懐しい土の匂ひを嗅ぐやうな氣がした。

それにしてもあのボーイは、今まで何に見入つて、何をそこに考へて居たのだらう。毎日々々澤山な客を送り迎へして居る人のことだもの、ほんの行きずりにも等しい自分のことなどを、なんとも思ふ筈はないと思つてみながら、面影の床しさに、自分がかうしてあれこれと少年を思つてゐるその心が、若しや少しは通つて居るのではないかしら、とも道子には思へるのであつた。

お互に手を伸ばしたら、握りも出来るだらうと思はれるほど、その窓とこの窓の間は近かつた。窓匡についた兩肘に、うそ寒い夕暮の風が冷たく觸れて行く。正面に振り向くことは避けて居るけれど、いつまでも道子の脇目に消えないボーイの顔が、だん／＼ぼんやりと暮れて行くらしい。

も一つ二つの驛で別れて降りなければならぬと思ふと、佯びしい心に、若様の顔やらボーイの顔やらが幻影のやうに動き廻つて、不思議に錯綜した感情が、窓から窓へと流れるやうに少年を包みに行くのを道子は覺えた。

つかり磨りまして、御紋付でも召しました時の外はすべて白木です。そして鼻緒は天鷲絨に限られたと申しても宜しい位外にのものは滅多にいたしません。

り大きくないものか宜しうございます、形は在
來の單衣などは廢れ氣味で近頃はとりとめない

來の單衣などは廢れ氣味で近頃はとりとめない
ヌーボー式のやうなものや、唐草のやうなもの
ゝ透し彫に人々の嗜好が向いてまゐりました。
リボン は模様の物でなく、荒い縞とか平綱風のも
のが一般の嗜好に投じますやうで巾は以前より
も稍狭くなりました。大抵三吋位、色は青磁色
か薄い硃紅色とか云つたやうな薄色です。日本
髪用のものは大した異りはありません、たゞ蒔
絵の櫛は平生用としてさゝれることが少なくな
りました、桃割れにも島田にも昔の花櫛と云つ
た摘み細工のものが喜ばれて居ります。

指輪は昨年と大した相違はありません。寶石
入が歡迎されますが、その中でも殊にダイヤは
申すまでもなし眞珠エメラルド等が多く、マレ
キサンドリアも皆様の御注意を引くやうになり
ました。作り方は眞向に見たところ、可成地金
の見えぬやう寶石をとめる爪數など四本或は六
本位が安全でもあり中庸を得るとでも申します
が最も多く流行します。四五年前までは菊形の
爪が流行しましたが今日では大分變つてまわり
ました。昨年は寶石を花とか寶とかに擬して葉
や枝をつける形が流行しましたが、着物に引か
けて損じ易きため餘り突飛な形は少くなり、寶
石を中心として、左右略均しき意匠で目につく
ところは細目で指の腹に當る處は、均衡を失は
ぬ限り廣くするが流行です、それは指に箝めて
クル／＼廻らぬ爲めであります。

履物に冬の間は重に胸下駄が喜ばれます、けれどもやはり正装の時は大概草履でございますこれは普通の表付の外に縹珍表、天鷲絨表、博多表などいろいろあります、上品なのは縹珍です、縹珍表に共糸緒、共爪皮のつきましたものが一番お上品でございます。胸下駄は塗垂がす

よく、日本髪と束髪とは何方が宜いかとおた

作品種目

丙・			乙・			甲・		
種・			種・			種・		
題	俳	短小	長	書	感	散	小	
畫	歌	品	詩	簡	想	文	說	
(本紙體裁に倣ふ)	(一人十首以內)	(廿行以內)	(三十五行以內)	(廿四行以內)	(廿四行以內)	(廿四行以內)	(百廿行以內)	
.....								
編輯局選	編輯局選	白木絲子選	望月れい子選	松井靜代選	若山喜志子選	水野仙子選	小笠原貞子選	

其他、小評論、小劇評、處女宮(實際欄地方文壇通信圖書交換等)等を大いに募集す

賞品目錄

種種種
甲 乙 丙
（一等金二圓內外、二等金一圓五十錢內外、三等金一圓內外）
（一等金一圓五十錢內外、二等金一圓內外、三等金五十錢內外）
（一等金一圓內外、二等金五十錢內外、三等金三十錢內外）
總て圖書
或は物品
にて呈す

一、投書は一切女子に限る。一、投書は各欄共政治時事に渉る可らず。一、各種の投書原稿は字詰、行數を前記規定に倣ひ必らず全部振假名の事、而して各章毎に別紙に認め、封筒に「處女原稿」と朱書すべし。一、當選者は寫眞至急御送附ありたし。一、送賞は發表其月末とす。

（每月一回）

△一冊	(送料と)	前金拾六錢
△三ヶ月	(三冊)	前金四拾八錢
△半ヶ年	(六冊)	前金九拾錢
△壹ヶ年	(十二冊)	前金壹圓七拾四錢

▷申込心得◁
注文は總て前番のこと◎振替貯金(ハ
東京一七二九番)にて拂込の時は必ず雜
誌代金の外に登記料金壹圓増しのこと
(用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れま
す)◎郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと
◎最寄書店にて品切の時は直接發行元へ
御注文を乞ふ◎本社への照會は返信料付
に非れば回答せず

●廣告締切期限……毎月十五日の事
 廣告掲載料金は御照會次第御報す

大正二年十月一日第二號發行（價十五錢）

編輯兼發行人 野口竹次郎
印刷所 東京國文社
東京市京橋區大鋸町十一番地

發行所 女子文壇社

東京堂北陽館上田屋三陽堂
海堂長町堂永久堂大阪盛文館